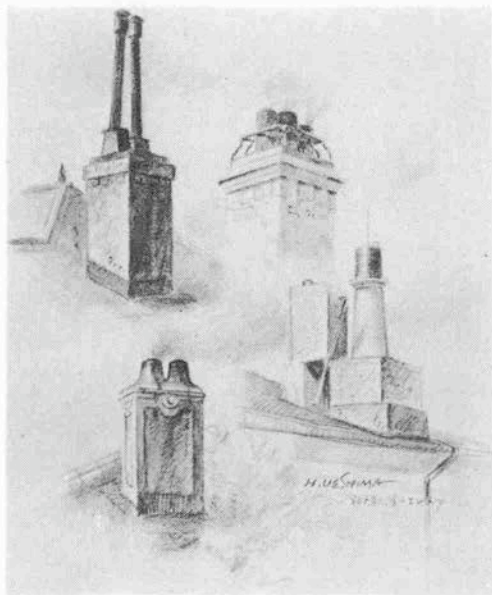


随 想



カット／上島秀明「神戸異人館のエントツ」

「ひのき」 のこと

駒井妙子

△「ひのき」同人▽



その日、私は丹羽さださんと阪急・西宮北口駅構内の喫茶室で出会った。二人で同人誌をやりたいねといつか話しあったことが計らずも実現の運びとなり、双方に都

合の良い西宮で会うことにしたが地理がよく分からないので間違いない駅構内を選んだ。

まず名前をつけることにした。

私は十四号まで編集したある同人誌を退いたところで、人間関係のいざこざに疲れていた。なにかさわやかな、青空に向かって突き抜けるような、強くまっすぐなイメージを求めていた。「爽」の一字も好きだが二番煎じのようで気が進まぬ。丹羽さんが「ひのき」を提案した。呼吸がびたりと合い、再考の要なくこれに決定した。

私は三月、丹羽さんは五月の同年生まれである。木曾谷出身の丹

羽さんはひのきの原生林の美しさを語る。心に沁みる随筆が書けるその心象の背景には、原生林のおおらかな自然のイメージがいつも消えずにあるのだろう。

私には魂の原点につながるものとして、伊勢内宮の社殿の、ひのきの白木造りがある。私は伊勢を知らなかったのだ、四十代も後半になってからたまたま志摩半島へ夫と旅行に出たついでに、はじめて伊勢路へ回った。人気がない秋の夕暮、そこで私が見たのは、太古さながらの簡素さと素朴さで、この宮に関わる俗臭に満ちた通念を吹っ飛ばすに足る本然の迫力で

あった。玉砂利からじかに社殿が建ち、樹皮を剥きとられ磨きあげられた白木は、塗料の色のない清らかな自然である。虚飾と人為の否定を見る気がした。

私も眼を凝らして、自分の中身を見ようとする。自分自身の真実の声を、それがどんなに幽かであっても確かに聞きつけ、聞き分け、自分の表現をみつめて息をつきたい。黒々と乾いた樹皮の中に、輝くように白い木肌がある。それを感じる、とき私はのぞみを持つ。

親の代から神戸に住みついて勉強のために三年間東京で暮らしたほかは神戸を離れたことがない。垂水の私の家から五色塚古墳が近く、少し奥に入ると大蔵山の堅穴式住居遺跡もある。五色塚の頂上から海原越しに淡路島を眺めると当時の状況が想像されてくる。古代には見渡す限りの青田の中に人家はまばらで、砂浜はひろびろと白かったであろう。

海は大昔から現在に至る人間の生活のことを考えさせる。原点に帰るとは、具体的にはなにを意味するのだろうか。樹皮を剥がれたひのきのようにペンキ塗りでない、まっすぐな心がほしい。自分が今日、ここで生きている事実を、その心でしっかり見据えてみたい。「ひのき」創刊号は五月下旬に発行できたが、季刊として続けたい

と知っている。現在は同人十二名うち男性二名。阪本英子さん主宰の「西鶴輪読会」も参加している。

随筆と小説の両建てを構想し、未熟な同人誌であるが、回を重ねていながら向上を目指したい。各自の書きたいこと書かずにいられないことを、「ひのき」を舞台に、力一杯書き切っていきたいと私は心から願っている。

■「ひのき」連絡先
神戸市垂水区五色山8丁目3の37
☎706・4115 駒井まで

但馬路の 小さな旅

岡田美代

△神戸文化ホールV



マカンブツサール（神戸の女性ばかりの夕食の会）の春の小さな旅は、かねてよりの念願かなって、兵庫県の但馬路をたずねることにしました。

陽春の4月19日朝、三宮北側のにしむら珈琲店前に集まった仲間達の嬉しそうな顔、顔。県の北村秘書課長さんの先導での但馬路は桜、つつじ、連翹、菜の花、チューリップ……と、さながら花の路

で、お天気も上々、最高にゴキゲンな旅となりました。

おそばにかけてはちよっとうるさい坂井知事さんが、「少し遠いけれどぜひ」と、最初に尋ねたのは、兵庫県竹野町床瀬の「床瀬そば」。そこはもう中国山脈の北詰に当たる、ひなびた山村でした。

先着されていた富田碎花先生や知事さんと一緒に、早速、囲炉裏を囲んでの宴となりましたが、まず、出された季節の山菜料理（特にやまめの串焼）の美味なことで、そしてメインの床瀬そばは、そば粉に自然の山芋をつないだ腰のしっかりした手打ちで、両手に余る程の量を冷たい山水で冷やして引きしめ、ざっくりと三つに切って竹皿に乗せて出されました。作ったばかりのそばを、その場で食べるのが最高という言葉どうり、これはもう、さすが……の深

右より坂井知事、富田碎花さん



い味でした。90歳と伺った富田先生も、たしか一人前以上を召しあがったようです。

松林と海の見える竹野海岸国民休暇村で一泊した翌朝、さらに待望のおそばを追って、城下町出石を訪ねました。昔は四軒ほどだったという「出石そば」のお店が、今では二十軒を越すほど有名になったとのことですが、私達はその中の一軒「甚兵衛そば」に陣どりました。

「……まあ、50皿でしょう」という地元の県民局次長山下さんの予想をこえて、私達が平げたのは100皿。皿そばといっても、たつぷり3口分が1皿の量なので、一人前5皿分ということ。マカンブッサーールでは、小泉さんが15皿でトップ賞。「こ立派です」とおほめにあずかり大満足の大満腹。信濃にはしなの、但馬にはたじまの味があることを、しっかりと知らされた旅でした。

芸どころ

神戸で…

芳村伊十七

△邦楽家▽



素敵な街「神戸」何がそれほど私の心に、入って来るのか、その気持ちには、神戸に訪れるにつれ、ますます深くなります。

私は姫路で生まれたため、幼い頃から、山と海の見える神戸に、大変憧れていました。

それが、不思議な縁で、東京へ長唄の修業に行くことになり、はや三十五年経ちますが、仕事で、神戸に参りましたのは、ちょうど「神戸っ子」が十年くらいたった頃だと思っています。大和三千世さんの紹介で、小泉美喜子さんと知りあいました。

彼女は、大変な食通で、洋食ですと〇〇〇、中華なら〇〇〇、和食になると〇〇〇というふうに、神戸に着くと、必ず食べ歩きをしました。おかげさまで、私も彼女に劣らず、食通になっていくつもりです。私達仕事仲間も、神戸に行くことを、楽しみにしており、新幹線の中でも、話題は、もっぱら、食べることに集中します。

しかし、美味しくて、素敵なお店は、他の都市にも、沢山ありますが、神戸の街での、食事は、いつも印象に残るのです。なぜ…。それは、山から見下ろされる美しい風景は、もとより、人間関係の素晴らしさだと思います。

私は二十年の間には、沢山の方々と、おつきあいするようになり

ましたが、その都度、心の温かいおもてなしに、我が家に帰ったような心持ちになるのです。

また神戸は、大変な芸どころ、洋楽はもちろん邦楽に対しても、かなりレベルの高い、愛好家が多勢いますし、舞踊の伴奏だからと思っ、気を抜いたりしますと、すぐに、見抜かれてしまいます。ですから、良きにつけ、悪しきにつけ、ニュースの広まり方は、NHKよりも速く、驚くほどです。そのおかげで、私達は、どんなに、未熟な子供達や、お年寄りが踊られても、一度も気をゆるめることもなく、精いっぱい、舞台を務めることが、出来るようになりました。

芸に対する、心構えの大切なことを、ここでも教わったような気がします。なお、この度、念願が叶い、六月九日、生田神社にて、今藤長之氏とのコンビで、「長唄の夕べ」を開かせていただくことになりました。

曲目は、「三曲糸の調べ」「たぬき」という大変な難曲に挑戦いたします。

これからは、ビールの美味しい季節となりますが、神戸での仕事、また一段と楽しみになってきました。

■「長唄の夕べ」六月九日午後六時より（於・生田神社会館4F）出演／今藤長之、芳村伊十七他。二千円。お問合せ／月刊神戸っ子

□ある集いその足あと

アルファ会

田中正郎

神戸灘ライオンズクラブ情報委員長
三洋化工株式会社代表取締役社長

私達の神戸灘ライオンズクラブには、いろいろのお仕事の方がおられ、その奉仕活動も多岐にわたっております。その中でもアーグコンサートは十五年間もつづいており、現在まで三十七回ひらかれて、有望新人音楽家の登竜門として地域音楽文化の向上に役立っております。

月刊神戸っ子の第九回ブルーメール賞を受けられた山内鈴子さんは、このアーグコンサートの第三十二回に出演され、昨年神戸灘ライオンズクラブ音楽賞を受賞されましたことは、皆様よくご承知の事と思います。

このような立派な音楽会とは別に気楽に皆と一緒に集って飲んだり食べたり喋ったり、ゲストをまねいて話を聞いたりする会をもとうと生まれたのがこのアルファ会です。

皆が集って、話をするだけでも必ずプラスアルファがあるということからついた名前のようなのです。

五十二年六月第一回の会合が行

われてから三年にして二十二回も開かれていることからしてもこの集いの人気がうかがわれます。

クラブのメンバーの方をはじめ各界の方をゲストに招いて、話を聞いたり、落語を聞いたり、芸談を聞いたり、酒蔵の見学をしたり観劇をしたり、柿をぬいで楽しい一時を過ごしています。



第22回アルファ会の集い風景より。嘉納純子さんをゲストに和やかな食事のひととき（5.10利宮で）

最近メンバーの家族の方や知り合いの方や、他クラブの方々の参加も増えてまいりました。

いろいろな場所で会合を開き、お酒を飲んだり、食事をしたり、ピアノを聞いたりしていますと今まで知らなかった感じのよい店、料理のうまい店を知るのも私達神戸っ子にとって楽しみの一つです。お芝居の中村時子さんや音楽家の二葉あき子さんもアルファ会に出席して下さいました。

常時アルファ会のお世話をしていただいているのは、藤本和夫、L置塩出、L荒木登夫、L押田真一、L吉田良祐、元メンバーの藤堂省吾氏でございます。紙上をかりて御礼申し上げます。

いつも一人で五人分の賑やかをふりまくL丹波郁三は今回欠席です。前出の写真に写っている剃髪の方は非常によくにしていますが、神戸ライオンズクラブのL谷口正信でございませう。念のため申しそえます。

第二十三回 アルファ会の

お知らせ

日時／六月十五日（日）

午前十一時より

場所／大阪、新歌舞伎座

新派観劇「大尉の娘」滝の白糸」

出演／坂東玉三郎、水谷良重他

アルファ会事務局

■神戸市東灘区小野崎通七丁目一八

三宮ビル6F 電話二二二一〇〇五

従来のレーズン入りに
新しくオレンジ入りのロズモンドが
生まれました

ROSEMONDE



ロズモンド
¥800……¥2,000

冷蔵庫にて適当に冷していただき
ますと尚一層美味しく召上れます

北 欧 の 銘 菓
ユーハイム・コンフェクト

■本社 神戸市灘区熊内町1-8-23 ☎221-1164

こうべにふれあいのディテールを

心の通う店創り

nick
KOBE NAGOYA TOKYO

神戸日建

商業施設全般・調査企画・店舗装備・設計施工

株式会社 神戸日建

本社(設計室) 神戸市灘区御幸通3丁目2-20
PHONE (078) 252-1321(代)

神戸事業部 PHONE (078) 251-3525(代)

名古屋事業部 PHONE (052) 561-3618

東京事業部 PHONE (03) 278-1369

●ローン・リースの開店資金のご相談を承ります。

□連載エッセイ／私のひろいもの△16▽

ドン山

竹中 郁 △詩人・絵も▽



もう五年くらい前になる。京都の北白川の吉川幸次郎先生のお宅へ一冊の本をとどけにいった。

その本というのは私の実兄の石阪孝二郎が兵庫の岡方会所の蔵からの古文書を掘りおこしたもので「朝鮮信使来朝帰帆官録」と称した。三年余りの日月を要したくらいの浩翰なもので、その虫喰い文字を補訂していくのは兄の手には余るようみえた。しかし、とにかく活字本として刊行。一般にも流布した。その本を吉川先生が何かの話のついでに私の兄の手になることを知って在庫の有無をたずねられた。

幸い数冊が残っていた。その一冊をもって私が北白川の東小倉町へ伺った。バスの通る道からは入りこんでいるから静かな一劃であった。大きくはないが手入れのいい家だった。

折柄どなたも外出で、先生じきじき玄関の戸をあけに出てこられてこう言われた。今日はわし一

人でお茶もさし上げられんがゆっくりして上がってもらいたい。

そう言われると、すぐおいとまするよりもこの世界の碩学の家の中をとっくり目におさめておくのも悪くはないと思って、玄関脇の六帖くらいの応接用の室に腰を下ろした。学者の家として書物や掛物が十分にあるのは当たりまえながら、よく片付けてある印象がのこった。

「おなじコオジロウですが、私の兄の方のは学問としては駆け出しです。ただ私が持参して先生の手を受け取ってもらったしるしに、ハガキで礼状を書いてやってもええまへんか」

「いやいや、手紙を書いて礼をいうよ」

こうして、今日でも兄の家に吉川先生の立派な書翰がつたわっている。この本を届けるのが目的ではあったが、もう一つ念を押しておきたいことがあった。

「先生のお宅が花隈のドン山のうらの南向きの二階建やったことは戦争前に何度も通って知ってます。しかし、育ちはあそことしても」と、私が言うや否や、「生まれたのもあそこや」と打てばひびく返事であった。

神戸の生んだ学者や芸術家の出生地、居住地を確かめておいて、石のしるしでも建てたいのが町に品格を添え、また、後人に品位を与えるさすが



の一つと考えるからだった。

「こんなぶしつけな質問、かんにんしくなはれや」というと「間ちがわれるよりは気持ちさえがな」とさっぱりと男らしい。

一九八〇年四月八日、先生は逝かれた。大谷本廟での告別式はうすら寒い風が吹いて、折柄の桜花をちらした。

かねて私は吉川博士の学問の深さや広さとともに、その現代文章の駆使の自由自在で、しかも明晰で香り高いことを賞でて、「先生の現代文は日本一」というと、「詩人にそう言われるとありがたい」という返答をもらった。

亡くなられる五カ月前、私の詩集を差し上げたら美しい和紙に細字の手簡をいただいた。花隈の今は市立駐車場のうらの坂道を「上伊」の側から登ると、三十歩ほどで地藏の祠、その先きの右側のビル「電設」というのがむかし、幼少年ころの吉川先生が住まれた家のあとである。先生は明治・大正のころ、草ぼうぼうのこの丘のほとりで、港をみはるかして遊ばれた。世界のひろさを十分に感じて勉強された。この小高い丘には、港内の碇泊船に刻を知らせる張りボテの球が吊られていた。正午直前に竿のさきに上って、正午に落下する。碇泊船からは見張りがみつめていて、それ正午だ。と知ったものだ。

吉川ハンはな、小さい貿易屋でな、と詳しく確証してくれたのは元町のサノへの初代主人だった。その初代がまだヤタナカオに在職中に吉川邸へ出入りしていたという。

神戸歳時記●六月

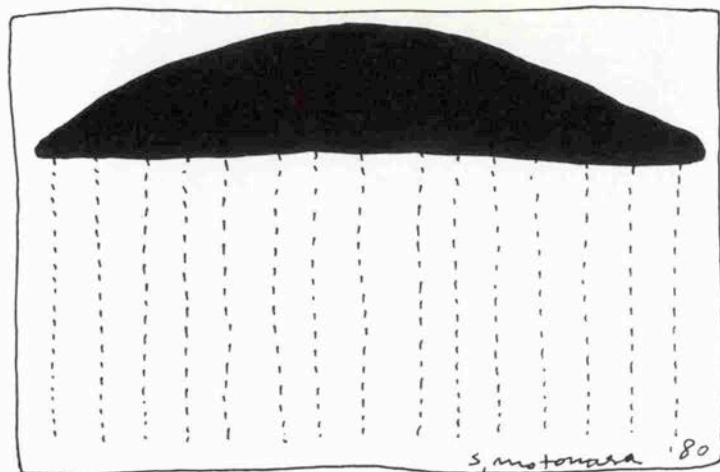
梅雨の

トア・ロード

三枝和子

〈作家〉

絵／元永定正



雨は傘の上に降ると、ひときわ美しくなる。トア・ロードは緩やかな坂道である。下っていくとき、色とりどりの雨傘の上へ降る雨をずうっと見渡しながら歩いて行くことができる。

私は人を捜していた。雨の日にその通りを歩けば、もう一度出会えるのではないかという、微かな望みがあつたからである。

昨年のことである。執拗な梅雨空だった。蒸し暑くぶあつい、水分をたっぷり含んだ空気がアスファルトの路面から丁度私の首までの高さのあいだに充満していて、それが空から降って来る雨粒よりももっとやり切れなかった。

回教寺院のドームが灰色の空に変にくっきりと眺められた。屋根は、天気の良い日よりもなぜか色鮮かに見えた。

「ネ、アノ、テッペン、ヒッカカッテ、イル、ネ。ヒッカカッテル」

「――」
声を掛けられて驚いて振り向くと、真っ黒な中国服に太りじしの身体を包んだ背の低い女が立っていた。年齢の頃は六十五、六だろうか。眼尻の皺が優しかった。

神戸に永く住んでいる中国人なら、こんなふうなたたとどしい喋りかたはしない。それにアクセントが東京風でもなければ神戸風でもない。妙に落ち着かなく語尾が撓ねあがるのだ。

「アノ、テッペン、テッペン」

老女は子供のような甲高い声で繰り返した。しかしドームの天頂には何も見えない。私は首を振った。

「ミエナイ。アナタモ、ミエナイ」

老女は悲しそうに眉をしかめた。

「あすこに、何かいるのですか」

すると老女は大きく頷いた。

「何がいるのですか」

するとまた大きく頷いた。

私は当惑した。別に時間の約束があるわけではない。ショッピングにふらりと出て来たのだから、急ぐ必要はないのに、何か妙な関わりがあとをひきそうで逃げ腰になった。

老女は両手をひらひら振った。言いたいことがあるのだが言葉が出て来ないもどかしさからか、照れた笑いを浮かべている。

「鴉が見えるのですか。か、ら、す」

私は一語一語区切って言った。

「カ、ラ、ス？ イイエ、チガイ、マス」

老女は不意に怯えた眼つきになった。

「カラス、チガイマス、ワタシハ、カラスジャナイ」

「……」

今度は私がびっくりした。鴉じゃない、と老女が叫んだとたん、老女が巨大な鴉に見えて来たのである。私は思わず眼を閉じた。雨傘がいきなり十倍もの重さになって右手がじいんと痺れた。汗が全身の皮膚の表面からどっと噴きあがって来た老女のさしている真っ黒のこうもり傘が鴉の翼になって私の視野を斜めによぎって飛び立って行った。

「――」

ふと目を挙げると、老婆の姿は消えていた。中山手三丁目の交差点があり、大きなワイパーをゆっくりと動かしながらバスが通り過ぎて行くところ

ろだった。

私は、そっと周囲を見回して額の汗を拭いた。雨脚が先刻より幾分激しくなつて、トア・ロードは煙つてなだらかに港の方へ下つていた。レモン、イエロー、ネービー、ブルー、水玉模様、ストラップ、サイケ調、アート・ポップ調、種々雑多な傘の流れが、ゆるゆると動いていた。

交差点を渡り、私は見失つた黒いこうもり傘を捜した。色鮮かな傘の群に混つても、いや、色鮮かな傘の群に混るのであれば一層、きわだって目立つはずの黒いこうもり傘を捜した。

あこや亭を過ぎて少し歩いたあたりで、私は立ち停まった。

居たのである。あの真っ黒な中国服が、両手で大きな水晶玉のようなものを抱えて、居たのである。こうもり傘はどこへやつてしまったのか、雨に濡れそぼって、髪がべったりと額に貼りついていた。

「あ、これですね。これが、あの、てっぺんに引っ懸つていたんですね」

私は昂奮して大きな声になった。しかし老女は不思議そうに私の顔を振り仰いだだけで、一言も喋べらず、身を翻えして小路に消えた。歩くとき、よち、よちと身体が左右に揺れた。老女は纏足だった。老女の消えた小路の向うから、乱暴な男の怒鳴り声が聞こえた。私には分らない中国語だった。老女が叱られているに違いなかった。

もう一度その老女に会いたいとい、私は梅雨のトア・ロードを歩いている。今度会ったら、あのドームのてっぺんには水晶玉の空があるのですね、と言ってみよう。



□ 随筆

サンパウロ・デキシールランドバンドと黒人・バルビーノ

右近 雅夫（絵と文）

△在ブラジル。オリジナル・デキシールランド・ハートウォーマーズ・リーダー兼ドラムベッター奏者▽

僕はサンパウロに来て間もなく、マジックインクの工場を始め今日に至ったが、毎週金曜日の夜、「サンパウロ・デキシールランド・バンド」という当地のデキシールのバンドでコルネットを吹くことが唯一の楽しみである。サンパウロは人種の「るつぼ」といわれる通り、世界中からあらゆる人種が集って、仲良くやっている処であるが、我々のバンド一つを例に取って見ても、発足当時のリーダーでピアニストのバート・ヴァン・デル・シェーは名の通り、オランダ人で、コンピュータのエキスパートとしてブラジルに定住、自分でコンピュータ関係の会社をやっていたが、三年前病気で倒れオランダに帰ってしまった。トロンボーンフェルナンド・キフリはレバノン系で「トルコ」というニック・ネームで呼ばれている。彼が大学を卒業して就職した頃からの友達だが、今は偉く成ってしまって、北米系のアイスクリーム会社の副社長をやっている。もう一人のトロンボーンでバンドの司会をやっているのが、ウィリアム・アン

ダーソンというイギリス人の二世で、イギリス系の大きな製菓会社の副社長をやっている。バンドが発足当時クラリネットをやっていた男はロベルト・オウアキールというフランス系のユダヤ人だったが、不幸な事に五年前に死んでしまったので、ジル・コレイア・ダ・シルバというブラジル人が彼の後を継いだ。彼はサンパウロ市立交響楽団のメンバーでもある。コントラバシスタ（コントラバスプレイヤーのこと）はサンドル・モルナールというハンガリー人で、彼もシンフォニーの団員である。パンジョーのデッシモ・マゾカットとドラムのペドロ・ロドヴィグシの二人は名の通りイタリアーノの子孫である。

僕は毎週金曜日の夜、コンソラソン街二〇〇四番にある「オプス・ドイスミル・クワトロ」というジャズ・レストランテに集り、明け方迄熱演するのである。メンバーはそれぞれ他の仕事を持っているので、全員が揃って練習する機会が無く、従って即興的な演奏に成ってし



サンパウロ・デキシールランド・バンドのメンバーたち。後列左より筆者、ロベルト、フェルナンド・キフリ、ローリー、ウィリアム・アンダーソン、前列左よりベドロ・ロドヴィシ、バート・ヴァン・デル・シェー、デッシモ・マゾカット、ポップ

まうが、びたりと息が合った時程嬉しいことはない。ところで、もう一人サンパウロ・デキシールランドバンドと切っても切れない関係にある男に、オプス・ドイスミル・クワトロのポルティロ（ドアー・マン）、バルビーノがいる。彼はルイ・アームストロングそっくりの顔をした底抜けに人の良い黒人で、バンドの中でも一番いたずら者のデッシモとフェルナンドに何時も一杯喰らわされては、きやつきやつとはしやぎ廻っている。彼は毎晩、派手なチェックの背広にカンカン帽をはすかいかぶり、オプスの入口に立ち、お客の乗って来た車を駐車場に運んだり、雨の日には大きな雨傘をさして客を車迄送り迎えし、チップをもらうのが仕事である。ある日、フェルナンドが僕等に良く見ていると目くばせし、すまし

た顔をしてバルビーノの側に行き、ポケットから小銭でも取り出すようなジェスチャーをしながら、「おう、バルビーノ！少しだけこれでお前ウイスキーでも飲んだらどうや？」といって、てっきりチップでもくれたのかと思って、喜んで差し出したバルビーノの手に氷のかけらを握らせた。一杯喰らわされたバルビーノは、氷をフェルナンドに投げつけて僕等と一緒にきやつきやつとはしやぎ廻った。ブラジル語で「ピアーダ」というと、俗に「笑い話」を意味するが、ブラジル人の男が数人集ると、何時も始めるのがこのピアーダである。やせぎすな体に濃い口ひげを生やし、何時も半分笑ったような顔をしているデッシモは、我々のバンド一番の茶目で、絶えずしやれたピアーダをとばしては僕等を笑わせるのである。ある時、ステージの合間に僕等が入口のサロンで雑談していたら、ちょうど、そこへ来合わせたバルビーノの前に、デッシモが傑作なピアーダを語り出した。

ある日、街でパバガイオ（ブラデル産のおうむで人間の口真似が巧い）を肩にとまらせて黒人が「パバガイオ買わんか——」と大声を張り上げながら走っていた。

ちょうど、そこへ通りかかった処、今迄だまって黒人の肩にとまっていたパバガイオが、突然、「お猿さん買わへんか——」といった。

其処迄聞いた途端、バルビーノ始め、その場にいいあわせた連中が、一斉にころげる様にして、腹を抱えて笑い出した。勿論、一寸お猿さんに似た容ぼうの持ち主のバルビーノとパバガイオのやりとりを連想して皆笑ったのだが、黒人の目の前で黒人の笑い話をし、皆が大声で笑いこけるのを見て、僕は何年前か前、ブラジルのカルナヴァルを見物に日本からやって来た人が、「右近はん、ブラジル人ちゆうたら、ほんまに子供がそのまま大きい成ったちゆう感じの人種だんな。」といった言葉を思い出し、「ほんまに巧いこと表現しよったもんや」とつくづく感心した。

話題のひろば

<I>

□ 第二回真珠振興議員連盟開催

真珠の発展願い 七十人が懇談



写真はいずれもホテルオークラでの第2回真珠振興議員連盟の会場の模様

昨年三月、日本真珠振興会広報委員会が発足したが、その事業の一つとして同年六月十二日、ホテルオークラにて第一回真珠振興議員連盟の朝食会が開かれた。これは、真珠産業の振興と発展、業界の躍進のため国会議員有志と真珠業界側が懇談、意見交換の場として発足したもののだが、第二回は去る五月八日、午前八時からホテルオークラ「星雲の間」で開かれた。

会は、中村友一日本真珠振興会広報副委員長（御影貿易商事）の進行で進められ、田村元同連盟会長（前運輸大臣）、石井一同連盟幹事長（自由民主党兵庫県連会長）本間利章日本真珠振興会長（ミキモト）、森正男全国真珠養漁業組合連合会長（伊予真珠）、田崎俊作日本真珠振興会広報委員長（田崎真珠）各氏のあいさつのあと質疑応答が活発に行われた。

この日、国会議員側からは「紅一点」の大鷹淑子さん、農林水産政務次官の近藤鉄雄さんら四〇名業界側からは生産、加工、流通の各代表三十名が出席した。

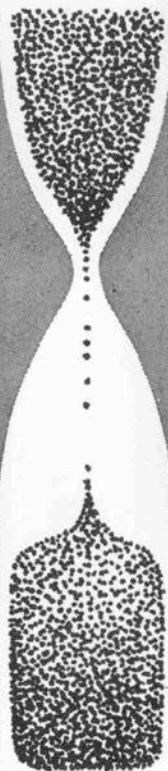
神戸からの出席者は次の通り。

田崎俊作、金井厚日本真珠輸出組合理事長（帝真貿易）、奥田一郎同副理事長（奥田真珠）、森正男、木下章夫日本真珠輸出加工協同組合理事（木下真珠）、森隆日本真珠輸出組合副理事長（森真珠）、中村友一、山本勝（株）山勝真珠会長、久野義昭久野真珠商会社長、大月尋男（株）大月真珠社長の各氏。

★キャンペーン

国際文化都市神戸を

考える



(31)

美と優しさを生み出す 世界の真珠都市・神戸

藤本 ハルミ ハフアッション・デザイナード

田崎 俊作 田崎真珠株式会社社長
日本真珠振興会広報委員長

山本 登里夫 山崎真珠株式会社専務

森 隆 森真珠株式会社社長

中村 友一 有限会社御影貿易商事社長
日本真珠振興会広報副委員長

平井 信義 平井真珠商會社長

木下 章夫 株式会社木下真珠社長

見直された真珠の良さ

最近、ファッションの中にも真珠がよく採り入れられ、真珠業界としても活況を呈していると聞いております。まず、業界の現況というところからお願いいたします。田崎 今年になってから真珠は非常なブームを呼んでいますね。これには経済的な条件といえますか、原因もいろいろあるかと思いますが、やはり、真珠の本質といえますか、本来の良さが見直され、日本国内のみならず海外の需要が増加の一途を辿りつつあるという感じですが、真珠の養殖は非常に長期になるので、売れるからといって右から左へつくるわけにはいかない。増産体制は急には出来ないにも関わらず需要が非常に伸びている。そういうことで今年は非常に活況を呈しているというのが

現状ではなからうかと思えますね。

森 今年の真珠のブームの背景は、昨年の八月以来の円安ということでクリスマスに向けてバイヤーが買いに走ったということと、そのあと金が続く暴騰した。真珠は海外において主に宝石店で扱われるので、金と比べて割安になった、ということも大きな援軍になりました。真珠の輸出量は十年ほど前と比べると三分の一ほどに落ち込んでいた。生産高も今は一番量が少ないところへ需要が出て来た。今の生産量は昭和三十三年の浜上げの量に相当します。そこへ海外の需要が出て来て、国内でも半数が売られているということで、一気に真珠が見直され、値段も強く推移しているということが現況ですね。中村 私の方は特にアメリカ向けの輸出が多いのですがアメリカではここ十年来、非常に停滞した状態だった。

それが去年の暮から非常なブームで真珠が売れ出ししました。例えばアメリカのティファニークラスの真珠を扱っている大きな会社や団体がグループを組んで、「パールイヤー」ということで全米的に大いに宣伝をしようという動きも出ています。この五月から始めて、ワシントンニューヨーク、フィラデルフィア、サンフランシスコなど各地でピー・アールを進めています。

平井 森さんは金と為替相場と生産量の三つの条件をいわれるのですが、その中では金との相関関係で非常にポピュラーになって来たという感じがする。というのは、アメリカなどの場合には、金のチェーンに真珠がファッションのにやられたという感じがあったのですが、今や金のチェーンがとても高くなった。小売りの段階ですと男性がつける金のチェーン、プラス、クリスティアンだったからクロスのチェーンが、大したものには見えないのですが、大体二、三千ドル位はする。もし真珠のネックレスで二、三千ドルというとかなり良い品質のものになりますね。また、高騰ばかりでなく、金のコスト自体が非常に不安定だし、そういうことで、真珠にスポットライトが当たって来たということだと思います。



藤本ハルミさん



田崎俊作さん

山本 真珠は生産、加工、流通と各段階がありますが、今年のように生産から最終の消費に到るまでの各段階において満足な結果が得られているということは、この業界はじまって以来のことではないかといわれています。真珠は私どもの身の回りを飾るものとして歴史的に一番古く、現在までに到っているということは、将来においても非常に有望で、必要な宝石ではないかと考えています。

木下 真珠の水揚げ量は余り変化しないし、特に良質の真珠は限られていますね。少なくとも国内販売に向いているのは半分位だと思う。特に神戸では良質の真珠を売っていたみたいです。また、消費者にそういうものを買っていただきたい。旅行者向けのお土産として安物を買ったりすると真珠のイメージダウンになりますね。ただ、良い真珠は、イコール高いということですが、一般の方も高くても良いものを買う方が満足をしていただけたと思う。そういうものでないとファッションとも調和しないと思います。

先日、台湾の故宮博物館へ行って来たのですが、五〇点、真珠が陳列されていますね。多分、地中海から来たものだと思いますが、時計の周囲に小さい珠を細工したものとか、七、八百年前のものです。当時の天然真珠の良質のものを揃えている。だから今でも美しい光沢が残っている。真珠は伝統的な商品だから、良いものだけを残して欲しいですね。そういう動きを神戸から日本全国へ広げることが大切ですね。

真珠が好調なのは、一つは、他の宝石が値上がりしたけれど、それに比べて真珠はまだ安いということと、それと、真珠のもつやさしさ、地味で自己顕示が強くないというところが好まれ、年齢に関係がないということでしょうね。

真珠のもつ多様性をファッションの中で生かしたい

神戸はファッション都市づくりを進めています、



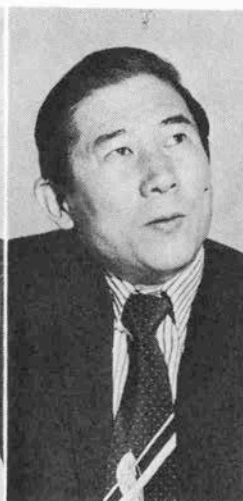
木下章夫さん



平井信義さん



中村友一さん



森 隆さん



山本登里夫さん

そういう意味で、ファッションと真珠は切り離せないものだと思いますが、そのへんいかがでしょうか。
藤本 真珠業界の方が、真珠とファッションについてどういうように考えておられるのか、お聞きしたいと思っています。

田崎 真珠の魅力は、根元的には余り流行に左右されない良さですね、それを維持して行きたいという気持ちと新しいファッションにマッチしたいいろんな使い方を我々自身が開発して行かなければいけないのではないかと思います。相反するものがある。しかし、幸いなことに最近の現状を見ていると、オリジナルの良さをもちながら真珠のもつ多様性、自在に変化する真珠の美しさが見直されている。以前は、フォーマルできちんとしていないといけない、真珠は丸くて流れるような美しさだけを、ということだったのですが、最近はやっとした色の変ったものも面白いし、ちよっと形の変ったものでもいいというように、服装の多様化に応ずるような真珠の多様性が発見されているようですね。

山本 ファッションはいつも変遷していますね。そういう意味では真珠のよく売れる年と売れない年とがあるのかと思いますが、今年は売れる年そうですね。各国のファッションが非常に多様化している。例えばフランスのファッションが基本だったのが、今年あたりは、アメリカのファッションが日本にやって来ている。また、日本のファッションがだんだんと進んで来て、日本からパリに進出したりで、フランス・アメリカ・日本の間に時間のズレがなくなり一致して来ていて、神戸ファッションというものが個性あるものとして浮かび上って来ている。そういう時代を考えてみますと、世界のファッションの目が今年あたり、神戸へ集ったのではないだろうか。また、石油問題などで世間が不安定、不景気になっているのですが、そういうときには、ファッションも本物志向になり、色はヴィヴィッドではなくブラウンとかグレイ、素材も女性的なものに移るといわれていますね。で

すから、世界的に真珠のような柔らかい光の女性的な素材が求められファッションの中に採り入れられるようになったのではないかと見方なのです。これからも当然、本物志向のファッショントレンドは続くと思いますがまだまだ真珠をファッションの中に採り入れていただくチャンスが多いと思います。業者としては真珠の品質を落とさないで、消費者に可愛いがっていただけるように商品づくりをする一方、出来るだけファッションの中に採り入れていただきたい、こう思っています。

平井 真珠の本質は、丸くて白くてソフトということからいうと、中性的でニュートラルですね。そういう美しさだとすると、比較的クラシックな感じですね。ところがこの二、三年、むしろ、クラシックではない、ジャズといいますが、スウェーデンのロックグループの「アバ」の音楽のように非常に変形し、中国産とか淡水真珠が非常にポピュラーになって来た。輸出の立場からいうと、急に真珠が好くなり出したきっかけは、むしろ、ノンクラシックな形の至んだもの、色の変ったものに対する需要の増加だという気がするのですが、確かに真珠の本質は非常にクラシックなもので中性的なんです、この二、三年の変化ということでは、淡水関係の色形ともに変わったものが非常にポピュラーになり、それによって逆に新たにクラシックの良さを見直すという形で、今、進行しつつあるという気がするのですが。しかし、本質的に真珠とファッションを考えるなら、比較的小となしくて、ニュートラルで、クラシックなものとの調和ということだと思います。

中村 アメリカでも一つのサイクルがあるそうですね。今から五、六年前にはオーストラリア・オパールというもの爆発的に売れた。それがピタッと止まって、そのあとにカジュアルなものが若い人たちを中心に流行って来た。その中で真珠は忘れられた形になっておりましたが、本物志向に帰って来た。本物とはいっても変わらんものですね。何年たっても人の心に迫って来る。本物

の真珠はいつまでたっても人の心に訴えつづけるはずですね。そういうものを大事にしながら、その中で現代を生かして行く、ということが一番大事だと思いますね。森 公式の席では大い真珠が使われますね。本物としての真珠とそれにファッションが加われば、もうちょっとエレガントな感じではないかと思えますね。藤本 みなさんのおっしゃることに私も同感です。ファッションは今、非常に多様化していますね。ディオール

までですね、その人がつくるものが世界を風靡したのは第二次大戦後、大衆が力をもつて来て、富の分配が変って来た。昔は王侯貴族の服のデザイナーが世界のデザイナーであって流行をつくっていたのが、大衆が力をもつて来て、大衆のファッションをつくるアパレル産業が抬頭して来ました。この三十五年間、流行については世界各国でもすごく大きな変革があったわけです。昔ながら大衆は真珠を自分のものにするのは殆んどなかったのが、戦後日本も豊かになって誰でもが手にすることが出来るようになったのです。戦前とは隔世の感がありますね。真珠業界が状況を呈して来たということです、流行だけで売れているのかというと、そうは思いません。世の中が豊かになったから真珠を買う人がたくさんになって国内でも需要が増えているわけですね。

また、真珠の玉は非常に秀れた女性、理想の女性のような気がします。どんな服に着けても自己主張が少なく、それでいて、品の良さや白っぽいということ、顔の周りにもって来た場合、顔に明るい感じを与えるということですね。黒い洋服の上のった真珠が一番よくその効果を上げていますね。

結局、流行がこうなったから真珠が売れるというではないですね。大きい周期では真珠がある程度行き渡ったので、ちょっと中だるみになって、また一息して売れるということはあると思いますが、今のアパレル産業の動きをいろいろと見ていますと、こういう流行になったから真珠がドツと売れ出すということではなくて来てい

るのじゃないですか。真珠を一つ買ってあげれば自分の代
だけではなくて、子供にもやれるし、というように、生
活が非常に堅実になって来たから本物が求められ出した
と思います。

木下 ファッションと真珠というのですが、私の考え
は、日本人は茶色の肌ですから、白い真珠だけが似合う
とは限りませんね。グリーンだとか、黄色だとか、真珠
にもたくさん色があるのですから、真珠の「色」をフ
ァッションの中に組み込んで欲しいですね。真珠とい
うと、みんな白だとかピンクだとか思っていますが、真珠
の色をファッションショーにとり入れてもらうと、普段
は余り見ていないので、あ、これもいいなと思われるこ
ともあると思う。そういう努力が必要でしょうね。昔は
色のついた真珠は珍重されたものです。天然でできます
のですね。

神戸は真珠にとって理想的な環境

——業界側でもデザインコンテストをズツとやっていら
っしゃるようですね。

田崎 真珠が不景気といいますが、停滞したときに、需
要の目途をつけたということ、まずデザイナーに関
心をもって貰おうという市場開発の第一弾として始めた
ことです。海外からも応募があり、国内的にもかなり反
響があり、効果は上っているという感じはあります。

よく神戸ファッションといいますが、神戸は世界的な
真珠の集散地ということで、真珠を使うこと自体が神戸
的であろうと考えています。(笑)

神戸にこれだけ真珠屋が集まるのは立地条件がいいか
らですね。海も近いし、山も近い。空気もいいし、光線
もいいからですね。

中村 話を聞いていますと、東京の女性は神戸に神秘的
な魅力をもっていますね。東京はどちらかというと非常
にきらびやかで、シャンデリアの魅力でしょう。神戸は
エキゾチックな町とはいえないながら東洋的な神秘が残って

いる。真珠の光は、キラキラ輝くシャインではなく、ビ
ーム、ほのかな月の光ですね。シャインはダイヤモンド
で、ビームはほのかに内なるものを秘めながら外にじ
み出て来る魅力。それが東京やニューヨークと、神戸や
サンフランシスコとの差だと思う。そこに神戸と真珠と
のつながりがあると思います。

藤本 神戸に真珠の業者が多いのは偶然なんですか。

平井 歴史的な背景がありますね。これは聞いた話です
が、イタリアの宝石卸商がサングが地中海でとれなくな
ったので、四国や九州近辺に求めてやって来て、神戸に
住みついたのが口火のようですね。神戸は外国人にとっ
て常に住みよい町なので住みついたわけですね。真珠は
三重県でスタートして愛媛、九州と広がって行ったので
すが、神戸はちょうど三角形の頂点にあるという感じで
集散地として地形的にもいいわけですね。

田崎 それに昔は船で積み出していましたからね。

森 それと真珠は元々中国ですごく珍重された。翡翠と
同様関心をもっていた。中国の人は神戸と横浜に多かつ
たんですね。真珠は外国で価値が見出された商品なん
ですね。それで、便利ということもあって神戸に集って来
たわけです。真珠を選別するのは太陽光線によるわけ
ですが、光線の具合からいっても神戸は製品をつくるのに
一番向いていますね。

平井 神戸は真珠の原産地、本物の源泉地であるとい
うビー・アールを業界がやらないといけないし、事実、神
戸は世界で一番真珠のつくりやすい町です。

ポートピア'81で「真珠都市神戸」を知って貰おう

——来年三月から「ポートピア'81」が開かれますが、そ
こへんの話で締めくくりをお願いします。

中村 新しいファッションは本物を基盤として生まれて
来ないといけないと思います。真珠の新しいファッショ
ンを考えますと、あくまで、昔からの本物の持つ美しさ
を大事にして来たという基調と、デザイナーの新しい試

みがうまくブレンドしたような、そういう足が地に着いた感じのものをつくって行くということが一番大事だと思います。

山本 元来、宝石のデザインは単独に発達して来たと思います。ところが、最近では、アパレルのファッションが先行して、そのアクセサリーとして宝石のデザインが発達している。そこでトータルファッションといいますが、頭から足までの各デザインの調和が大事にされて来ています。ポートピア'81では、真珠とアパレルとのマッチといえますが、ファッションの多様化のため服の方の自己主張が強くなり過ぎまして、アクセサリーとしての宝石を拒絶する時代があったと思うのですが、今一度、良き調和が今後のファッションに要求されると思う。そういう問題提起をアパレルと真珠とが組んでポートピア'81でやりたいですね。

森 神戸はファッションの中心であって欲しいと思いますが、真珠についても、これからはもっと付加価値の高いいろいろなデザイン物もつくって行きたいし、神戸発でみなさんが絶対に無視できないものがつくれたら大変にいいと思います。また、ポートピア'81は絶好の機会ですから、神戸にファッション界ありというものをぜひやりたいと思っています。

平井 神戸の真珠業界では、若い年代の人たちがかなり活躍していますね。彼らに、ポートピア'81というチャンスを利用して、最終的な効果の問題はともかくとして、神戸が真珠の集散地の中心であるということをイメージアップしようという動きも現在あるようです。業界が結集して、ポートピア'81を機会に神戸が集散地であることを全国的に宣伝したいと考えています。

藤本 国内でもまだまだ真珠は売れると思います。というのはフォーマルな場でロングドレスを着る人が増えて来たのですが、ロングドレスには真珠は不可欠ですね。それと、デザインからいうと、あつ、こういう使い方もあったのか、といって使ってみたいと思わせるものでな

かったらいいデザインではないと思います。まだまだ真珠は多様に使えますし、デザインのにも伸びると思います。真珠とファッションが組むときにいつも思うのですが、服が見えない位にアクセサリーがものをいってはいけないし、服が目立ってアクセサリーが全然見えないというのもしないし、そこに何ともいえない位の調和が生まれる状態が最高にいいと思いますので、来年のポートピア'81では神戸発ということで我々デザイナーも頑張りたいと思っています。

木下 ポートピア'81では、これを契機に、真珠の産地は神戸であるということを、日本の方々には言うまでもなく、世界の人々に大いに宣伝したいですね。そこでも、パレティに富んだ色真珠で品質の良いものを出して欲しいですね。ただ、博覧会はお祭りの意味合いもあるので、余り固苦しく考えなくていい。楽しく見られるようお客さまへサービスを。宣伝効果は余り考えなくていいと思いますね。真珠館へ入ったら、面白かったね、という何かが来られたみなさんの頭に残るようなものがあればいいと思いますね。

田崎 神戸は業界の歴史からいっても実績があるわけでポートピア'81を機会に、真珠なら神戸だ、神戸は真珠だというイメージをさらに定着させたい。神戸だから真珠が使えるという条件を生かしていただいて、ポートピア'81でショーでもしていただければと思います。

藤本 そういう意味で神戸のデザイナーと地場産業との協力が必要ですね。

また今のところ全般的に大きな流れとしてはクラシックになっていますから、勿論、真珠はよく似合います。真珠もいろいろと分けられたらいいかがでしょうか。新しい使い方のものと、正統派のものと、いろんな種類のもので行かれたらどうですか。私たちも、品質的に落ちてもビーズのように小さくてたくさん使えるものとか、色がいっぱいあるとなったら、それを大いに使ってみてですね。

田崎真珠株式会社

取締役社長 田崎 俊作
神戸市葺合区旗塚通 6-3-10
TEL (078) 231-3321

オールスタイル株式会社

取締役社長 川上 勉
神戸市生田区伊藤町121
TEL (078) 321-2111

カネボウベルエイシー株式会社

取締役社長 稲岡 必三
神戸市生田区三宮町1丁目17-4
センタープラザ東館 8F
TEL (078) 392-2101

株式会社ベニヤ

取締役社長 松谷 富士男
神戸市生田区三宮町1丁目54
TEL (078) 332-3155

モロゾフ株式会社

取締役社長 葛野 友太郎
神戸市東灘区御影木町6丁目11番19号
TEL (078) 851-1594



キャンペーン「国際文化都市神戸を考える」の
企画は以上5社の提供によるものです。